〈私の研究〉

段玉裁『国語』校本の謎

小方伴子

張元済の『涵芬楼燼余書録』に「『國語』二十一卷、明覆宋刊本、八册、段玉裁、顧抱沖、顧千里校」という記載がある。底本は明嘉靖年間刊行金李本で、段玉裁の跋文がついている、とある。段玉裁、顧抱沖及び顧千里の校勘作業ついては次のように述べられている。

段氏讎校精審、卷中復有「逵案」、「廣折案」若干條、則顧抱沖及其從弟顧千里所續增也。

（段氏の校勘は詳細で行き届いており、巻中には「逵按」「廣折按」も若干みられるが、顧抱沖及びその従弟である顧千里が増補したものである）

『涵芬楼燼余書録』に收録されている善本は、一九五〇年代に北京図書館（現国家図書館）に移された。『北京図書館善本書目』（一九五九年版）をみると、「國語解二十一卷、吳韋昭撰、明嘉靖七年金李澤遠堂刻本、顧廣圻校、顧之逵校並臨段玉裁校跋、八册」（七三九五）という校本（書き入れ本）がある。私はそれを、『涵芬楼燼余書録』が「段玉裁、顧抱沖、顧千里校」「段氏讎校精審、卷中復有「逵案」、「廣折案」若干條」と記す本、すなわち段玉裁の『国語』校本に顧広圻（千里）と顧之逵（抱沖）が案文などを加えたものであると考えた。「顧廣圻、顧之逵校並臨段玉裁校跋」となっているが、目録の誤りであろうと考えたのである。その頃私は、『国語』明道本の重刻刊行を研究テーマとし、「宋明道二年刊本『国語』の黄丕烈重刻について」（『人文学報』四〇三号）という論文をまとめていたが、それが一段落したら、段玉裁の『国語』校本について調べてみようと思った。

二〇〇八年の夏、黄丕烈の『国語』校本を調べるために、中国国家図書館の善本閲覧室を訪れた。スタッフの方々がさまざまな便宜をはかってくださり、黄丕烈の『国語』校本と恵棟の『国語』校本を並べて閲覧するという、奇跡のような時をすごした。最終日の朝、ふと思い立って、「段玉裁の『国語』校本」の閲覧を申請した。時間があまりなかったし、貴重な原本の閲覧を重ねてお願いするのも憚られて、「取りあえずはマイクロフィルムで」という選択をした。本格的な調査は次年度に持ち越すつもりであった。ところが投影機に映し出された書き入れをみて、「次年度に」という思いは吹き飛んだ。欄外に書き入れられている段玉裁の校語の字句が、『校刊明道本韋氏解国語札記』（以下、『国語札記』）に「段云」として引かれている字句と、部分的に一致していたのである。全部ではなく部分的というところに、『国語札記』における段玉裁の関わり方を示す重要な鍵がある。私はその八十二箇条の校語を夢中で写し取り、帰国後、「『国語札記』における段玉裁校語について」（『人文学報』四一八号／修正版『『国語』の版本と校勘学の研究』（平成二〇―二

二年度科研報告書）という論文を書いた。

数カ月後、論文をご覧になった或る古代中国語文法の先生からメールを頂戴した。心あたたまる文面の最後に、「段玉裁の『国語』校本が現存するのですか」という一言があった。それを目にしたとき、何やら嫌な予感がした。「臨本かもしれない」という不安がよぎり、わずか半日の調査で、しかもマイクロフィルムによる調査だけで論文をまとめてしまったことを悔いた。

その年の夏、再び中国国家図書館を訪れた。初日に原本の閲覧を申請した。開いて数分もたたないうちに臨本だとわかった。私が段玉裁の直筆だと思い込んでいた書き入れには、それと同じ朱筆で「癸丑清明前二日」（巻二巻末）、「癸丑清明」（巻三巻末）という日付が付されていた。癸丑は乾隆五十八年、段玉裁が『国語』の校勘作業を行ったのは乾隆三十四年である。墨色、筆跡、重ねが書きの状況などにより、校本に書き入れられた段玉裁の校語及び校勘記は、乾隆五十八年に蘇州近辺の校勘学者或いは蔵書家が、段玉裁校本から直接写し取ったものであろうと判断した。

それにしてもこの校本すなわち段玉裁の『国語』校本の臨本には、不可解な点がいくつかあった。例えば蔵書印である。韋昭の序文の標題「國語叙録」の下に、張元済、何焯、顧千里、汪士鍾の印が、その順番で並んでいる。何焯（一六六一年生）の蔵書印が、張元済（一八六八年生）と顧千里（一七六六年生）の間に挟まれているのである。また何焯、顧千里、汪士鍾の印は、『中国蔵書家印鑒』などに収録されているものと比べると、文字の形が微妙に異なっている。偽印ではないかと疑われる。さらに臨本の冒頭には何焯の題記がついているが、そこにも偽印と思われる蔵書印が押されている。『涵芬楼燼余書録』には、「藏印、「顧千里印」「黄丕烈」「蕘翁」「汪士鍾藏」「萬宜樓藏善本書印」」と記されており、何焯の名はない。張元済は何焯の印だけを偽物とみなし、記さなかったのだろうか。或いは張元済と何焯の印は、涵芬楼から北京図書館に移される途中で付け加えられたのだろうか。

いずれにしても国家図書館所蔵本は、その目録が示すように段玉裁の『国語』校本の臨本である。ただし臨本とはいっても、素性をある程度はっきりさせることができれば真本の代わりとして用いることができる。真本が逸している以上、それが最善の策である。私は北京での調査結果をもとに、「『国語』段玉裁校本とその臨本」（『人文学報』四三三号）を書き上げた。知り得た情報はすべて提示したつもりである。しかしひとつだけ、表に出さなかったものがある。書き入れに関する恩師の見解である。

論文に着手してまもない頃、私は師の研究室を訪れた。師は私の話を聞きながら臨本のコピーを眺めておられたが、そのうちふっとお笑いになり、何とも楽しそうなお顔で、「これは偽造です。涵芬楼から北京図書館に移される途中で本物とすり替えられたに違いない」とおっしゃった。蔵書印だけでなく、段玉裁の校語や校勘記の写し、顧千里や顧之逵の案文も含めて、すべて本物そっくりに模倣された偽物だというのである。

それはないだろう、と思った。私は北京で実物をみた。一週間かけて丹念に調べた。幾重にも書き入れられた校勘記や校語は、それぞれ墨の濃淡や筆跡が異なり、複数の人が、時を異にして書き入れ

たとしか思われない。そもそも誰が何のために臨本を臨本として偽造するのだろう。私が偽造するなら「癸丑」という文字は入れない。「好事家がいるのです」と師はいわれた。確かに、上海の涵芬楼から北京図書館に運ばれる途中で誰かがそっと抜き取り、それと同じ版本（金李本）に書き入れを写し取り、そちらをもとにもどしてオリジナルは「好事家」に渡したと考えれば疑問はすべて解消する。しかし当時の私には、あまりにも突飛な説に思われた。師の見解は見解として承り、論文の方は先に述べたところでとどめた。

それから二年後の冬、私は北京の古籍館で盧文弨の『国語』校本の調査を行っていた。国家図書館は改修工事中で、善本閲覧室は北海公園近くの古籍館に移転していた。原本は一切みることができなかった。マイクロフィルムによる調査には限界があり、最終日を待たずに、やれることが尽きてしまった。残った時間を無駄にするのも惜しい気がして、黄丕烈の『国語』校本の臨本を申請した。黄丕烈の『国語』校本は真本が現存しており、臨本をみる必要はとくになかったのだが、一応目を通しておこうと思ったのである。期待はしていなかった。ところがこれが掘り出し物であった。投影機に映し出された書き入れをみて、私は声をあげて笑った。静粛な閲覧室でひとり笑い続けた。三年前に閲覧した真本にそっくりだったのである。真本と同じ詩礼堂本に、文字の配置、墨の濃淡、書体から書風に至るまで、真本の書き入れがそっくりそのまま写し取られている。真本のマイクロフィルムも借りてきて、投影機を二台並べて比較した。「昔の臨本は複写版です」という師のことばが思い出された。段玉裁の臨本に対する師の見解も、けっして「突飛な説」ではない。大いにありうる説だと思った。

仮に黄丕烈の『国語』校本が逸していたら、この臨本を代わりに用いることができる。段玉裁の『国語』校本の臨本も、それがたとえ臨本の臨本であろうと、真本の代わりとして充分に使うことができる。改めてそう思った。段玉裁の『国語』校本の臨本はほかにも存在するかもしれない。本物そっくりの臨本が複数存在するとしたら、それはやっかいなことである。しかし同時に愉快なことでもあると思う。